史伝西郷隆盛物語

目次

はじめに
Ⅰ、西郷隆盛の生い立ち
Ⅱ、幕末
　1，藩主島津斉彬（なりあきら）との出会い
　2、島津久光との衝突
　3，対立から討幕連合への薩薩摩と長州
Ⅲ、戊辰戦争から廃藩置県
　1，戊辰戦争
　2，廃藩置県
Ⅳ、岩倉遣外使節団出張中と帰国後の西郷隆盛
　1，新政策の遂行
　2，征韓論と西郷隆盛下野
　3，征韓論者の下野
Ⅴ、西郷隆盛下野後の大久保利通（政府）の政策
　1，外交
　2、士族対策
Ⅵ、維新政府の行政組織
Ⅶ、私学校
　1，私学校の設立
　2，政府の鹿児島県の治外法権対策
　3，私学校生徒の暴発
　4，西郷隆盛暗殺計画
Ⅷ、西南戦争
　1，西郷隆盛の挙兵
　2，西郷軍の戦略
　3，西郷軍の編成

４，西郷軍の装備
５，政府軍の軍容
６，熊本鎮台（熊本城）攻撃
７，田原坂の戦い
８，日向（宮崎県）への転進
９，城山決戦
10、終戦

Ⅸ、西南戦争の勝因と敗因
１，政府軍の勝因
２，西郷軍の敗因
Ⅹ、西郷隆盛を取り巻く薩摩の志士たち
１，志士として同格で幼友達、親友、西郷が兄貴分
２，親類の志士たち
３，西郷の後輩、弟子の志士たち
Ⅺ、西郷隆盛の功績
１，幕末
２，維新政府
３，岩倉遣外使節団出張中
Ⅻ、福沢諭吉による反乱への批評
１，政府の責任
２，西郷の非なる所
ⅩⅢ、当時の知識人の西郷隆盛評
ⅩⅣ、西郷隆盛の心情、信念
ⅩⅤ、後日談
１，大久保利通、川路利良の死
２，西郷隆盛の銅像
３，三傑没後の明治政府
あとがき

はじめに

明治維新三傑と言えば西郷隆盛、大久保利通と木戸孝允となります。

西郷隆盛と大久保利通は薩摩藩（鹿児島県）で木戸孝允は長州藩（山口県）出身です。

共に尊王討幕運動を策動させ、鳥羽伏見戦争で徳川幕府（１５代将軍徳川慶喜）に勝ち、その後抵抗する北陸・東北の諸勢力との戊辰戦争に圧勝し、函館戦争で榎本武揚を降参させ、明治維新政府樹立を確定させます。

三傑の中でも維新政府樹立の最高の功労者は西郷隆盛であることは、戦後の論功行賞（賞典禄）でもそうですし、当時も現在も世間一般の評価もそうでしょう。

表題の西郷隆盛については明治維新以降西南戦争で亡くなるまでを主題とします。１０年間です。明治１０年９月２４日に自刃、５１歳でした。

明治に入って西郷隆盛はどのようなことをしたのか、そこから難しい西郷の心情、性格を見てみたいと思います。

西郷隆盛はいくつもの名前を持っており、後世いくつにも呼ばれますが、ここでは西郷言えば西郷隆盛のこととしたいと思います。

Ｉ、西郷隆盛の生い立ち

文政１０年（１８２７）鹿児島城下で小姓組勘定方小頭西郷吉兵衛の長男として、生まれました（明治維新は１８６８年です)。

身分は城下士の下士です。薩摩藩では侍の身分に城下士と外城士（半農士族）分かれ、城下士は更に上士と下士に分かれます。

幼名は小吉で通称は吉之助・善兵衛・吉之助等いくつも名前を変えていますが、吉之助が一番知られています。

奄美大島に流された時は大島三右衛門とも称していました。

江戸時代は武士は通称と共に諱（実名）を持っています。隆盛です。本当は隆永でした。隆盛はお父さんの諱ですが、友人が誤って明治政府に届けてしまいました。

西郷はこんなことは気にしません。隆盛で通します。

雅号は南洲(なんしゅう)です。

「西郷どん」（NHK 大河ドラマの題名）は「せごどん」ですが地元の人が親しみを込めて呼んだのでしょう。どんは殿でしょう。

ここでは西郷隆盛又は西郷と称します。

家族は、祖父母、父母、弟３人（次男吉次郎―戊辰戦争で戦死、三男従道(つぐみち)―海軍大将、元帥、侯爵)、四男小兵衛―西南戦争で戦死)。

一度目の結婚相手とは安政元年（１８５４）に離婚。安政６年（１８５９)、奄美大島に流されていた時に地元の娘愛加那と結婚し、菊次郎（京都市長）と娘菊子（従弟の大山巌の弟の夫人）をもうけます。

鹿児島に戻るときは単身で、その後子供二人を引き取ります。

慶応元年（１８６５）結婚、３人の子をもうけています。

薩摩藩には家臣の徳育のため郷中制度があって６歳から２５歳ぐらいまでその地区の郷中に属し、先輩から知育、体育を学びます。

西郷は郷中の青年の部の二才(にせ)の頭(かしら)として後進の指導を行い、若い者から慕われ、城下でも名を知られるようになります。

弘化元年（１８４４）１８歳で郡方書役(こおりがたかきやく)につき、１０年間勤めます。

斉彬(なりあきら)が薩摩藩の 28 代当主になります。西郷が農政についての意見書をだし、これが斉彬の目にとまります。

安政元年（１８５４）中御小姓、庭方役に抜擢され、斉彬の身近に仕えます。

以後斉彬に 4 年間家臣として仕え、師匠と仰ぎます。江戸や京で藩主や名士と交際が出来、西郷の名は全国的に知られます。

Ⅱ、幕末

１，藩主島津斉彬(なりあきら)との出会い

本論に入る前に一応幕末から明治維新（１８６８年）に至る政治過程を、西郷隆盛を中心に簡単に整理します。

ペリーがアメリカ艦隊を引きつれて浦賀に現れたのは嘉永６年（１８５３）６月で、ここから幕末の騒動が始まります。明治維新の 15 年前です。

尊王攘夷の運動が活発化します。

薩摩藩では幕末の四賢公の一人島津斉彬（なりあきら）が藩主でした。西郷は英才斉彬の庭方に抜擢されます。

庭方は斉彬の意向を他の藩主や名士への書状を運ぶ役と共に斉彬の意向を言葉で補足します。相手からの書状をもらい相手の意向を直に聞き、斉彬に伝える役です。

当時、殿様は簡単に会いたい相手と面談が出来ません。

これは大変難しい役です。斉彬の考えを知り、情勢を理解しませんと斉彬の意向を伝えたり、相手の質問に斉彬に代わって答えたり、又口頭での相手の質問を斉彬に伝えられません。

斉彬は、政治的には尊王開国で、天皇―徳川将軍家の体制を守る派で、富国強兵を薩摩藩の施策とします。

科学技術、工業の発展、導入を目指します。

西郷は斉彬から政治を学びました。斉彬は主君であり、師匠でもあって、大変尊敬していました。

幕府は大老に井伊直弼（いいなおすけ）を起用します。直弼は１４代将軍に尾張徳川家の家茂を推戴し、斉彬は水戸徳川家の慶喜（よしのぶ）を推戴し、両者の関係が悪くなります。

その中で斉彬は亡くなります（安政５年７月―１８５８）、５０歳。
日米通商条約でいよいよ開国です。

一方大老直弼による安政の大獄です。

西郷は斉彬が亡くなって意気消沈したところに、尊敬する同志月照（げっしょう）（比叡山の僧侶、近衛関白と斉彬派）が鹿児島に西郷を頼って逃げてきました。

井伊大老に殺されることを聞きます。助けられないことに意気消沈して一緒に錦江湾（鹿児島湾）で入水心中を計ります（１１月）。

月照は亡くなりますが、西郷は助かります。薩摩藩では幕府（井伊大老）にはばかって西郷を島送りにします（安政６年１月―１８５９）。島は奄美大島、徳之島、沖永良部島と移ります。

斉彬（なりあきら）に子はなく、後継は弟久光の息子忠義（ただよし）になりますが、未だ若いため

親の久光を後見人とします。久光は藩父として実権を掌握します。
井伊大老は万延元年（１８６０）暗殺されます。

２，島津久光との衝突

藩父久光は幕府内での実権を得るため自ら入京、江戸へ入府を画策します。

これを実行するためには外交手腕を持った西郷の力が必要との認識が薩摩藩執行部にありました。

西郷は斉彬の外交官として有力藩主、幕府要人、有力志士とも知己、懇意の間になっており、彼らから信用される仁になっていました。

大久保利通（としみち）などが強く求め、久光も認め、西郷を島より召還させ，復職させます。（文久２年２月―１８６２）。

大久保は幼友達で西郷と並んで薩摩を代表する幕末の志士で、当時久光とは関係が良かったのです。西南戦争では維新政府の実質代表として西郷を倒した仁です。

ところが久光が京に向かうに当たって、京で尊王攘夷の薩摩浪士過激派が騒動を起こそうとします。

西郷は久光が下関で待機の命令に服さず、薩摩浪士をなだめるべく下関を立って大阪に向かいます。

久光は命令違反をなじり、又徳之島へ島送りとします（文久２年６月―１８６２）。

３，対立から討幕連合への薩摩と長州

西郷は元治元年３月（１８６４、明治維新は１８６８年）に再び召還されます。伊地知正治（いちじまさはる）（同志）や大久保の運動によるものです。久光もしぶしぶ認めます。

島に抑留されている間に京では尊王攘夷派の長州の藩士と幕府と薩摩連合との間で騒動が頻発します。

ついに西郷帰還の年の１８６４年の７月に長州と幕府・会津・薩摩連合軍とが京都で衝突します。これが禁門の変です。

西郷は薩摩軍の参謀（指揮官）として参戦します。長州は敗退します。

西郷には藩主忠義から感謝状が出ます。

幕府は引き続き長州征伐を行います。西郷は幕府と長州の間に立って周旋し、長州恭順で収まります。

しかし翌年の慶応元年（１８６５）幕府は更に長州追討を計画します。西郷は乗り気でありません。

そのはずです。西郷は坂本龍馬（土佐の浪士）の仲介で、裏で長州の木戸孝允（桂小五郎）との間で薩長合従の盟約がなされていました（慶応２年―１８６６）。

幕府は知らずに、長州征伐を止めました。

１４代家茂将軍が亡くなり、慶喜が１５代将軍となります。

長州も尊王攘夷を止めます。攘夷の孝明天皇も亡くなりました。

もう朝廷も長州も開国に賛同です。尊王攘夷の浪士が未だ暴れますが、幕府軍や新選組に追われていきます。

この間、西郷は坂本龍馬を入れて長州の木戸孝允（桂小五郎）、土佐の後藤象二郎、板垣退助（乾退助）と挙兵討幕を約しました（慶応３年９月―１８６７）。

主人であるそれぞれの藩主はその頃はそれを知りません。

以前から公武合体の議論がありましが、大政奉還が坂本龍馬―板垣退助の提案で幕閣の実力者土佐藩主山内容堂の提案となりました。

慶喜将軍も同意しました。

慶応３年１２月９日（１８６７）正式に廟議に付されました。大久保利通は会議で「大政奉還で、徳川将軍本家は辞官と納地（領地返還）」を求め、強引に可決しました。

慶喜将軍（会議には出席せず）は怒ります。

他の藩はそのままで何故将軍家だけが領地返還か納得できない。慶喜は大政奉還後も政治責任者（総理大臣）は自分だと思っていました。

鳥羽伏見の戦い、明治維新へと革命は起こります。

Ⅲ、戊申戦争から廃藩置県

１，戊辰戦争

大政奉還と言え、徳川将軍家は辞官と納地（領地返還）を討幕派（西

郷、大久保利通）によって廟議で強引に議決されます。
　徳川慶喜は京から大坂城に戻り、反撃にでます。鳥羽伏見の戦いです（明治元年１月３日―１８６８）。
　討幕連合軍の総大将は西郷です。激戦でしたが、討幕軍が勝ちました。
　この後、新政府軍は江戸向け征討軍を発します。実質の総大将は西郷です。

　慶喜切腹が新政府で決定されていましたが、西郷は勝海舟との話し合いに基づき江戸城無血開城、慶喜赦免を維新政府に認めさせました。

　これが幕末、討幕、維新政府設立に関わった西郷の略歴ですが、大どころの施策へリーダーとして参画し、主要な内戦（禁門の変、長州征伐、鳥羽伏見の戦い、東征）には一方の大将として出征し、高度な外交戦術の手腕と指揮官としての優秀さで高い評価を得たのです。
　誰もが認める維新の最高の功労者です。
　維新政府は大将、元帥（後に辞退）の称号を与えました。以下に中将はなく少将（山形有朋）となります。参議になり内閣の構成要員にもなりました。

　明治維新、明治４年までの西郷の維新政府での活動（功績）を見てみます。
　江戸城無血開城に成功します。
　この後幕府残党の彰義隊が上野で反乱します。この戦いにも薩摩兵を率いて参戦しますが、この鎮圧の功績はアームストロング砲を用いた長州の大村益次郎となっています。
　大村益次郎と言う人は長州では幕末の末ごろに出てくる人で、元医師ですが戦略、軍政、戦術、砲術に長けていてで木戸孝允（桂小五郎）に認められ東征軍でも西郷に次ぐ地位でした。
　明治維新三傑に次ぐ功労者で、軍事では西郷に次ぐ人と言われましたが、明治２年に暗殺されます。
　西郷は上野での彰義隊討伐の後薩摩に帰ります。
　維新政府から反政府軍討伐のため北陸、東北への出馬を請われ、薩摩兵

を増員（既に薩摩兵従軍中）して向かいます。

しかし到着したとき（明治元年８月）は北陸の長岡城、東北の会津城、鶴ヶ丘城は落ちており、戦後処理の仕事でした。

ここで西郷は鹿児島で隠棲を表明します。何故か不明です。

としながら薩摩藩の改革を藩主島津忠義に頼まれ参政（家老）に就きます。頼まれればやる性格があります。

更に、翌年明治２年（１８６９）榎本武揚（たけあき）が立ちこもる函館（函館）の五稜郭（ごりょうかく）攻撃で又出陣を維新政府に要請され出馬しますが、その時も到着したとき（明治２年５月）は榎本武揚は降参していました。

鹿児島に帰る途中で東京に寄ります。

戊辰戦争の論功行賞があり、西郷は大名や公家を別にしますと第一等の２０００石の賞典禄でした（毎年米で給付）

後には１８００石の大久保利通（薩摩）、木戸孝允（長州）、広沢真臣（長州）、１５００石の大村益次郎（長州）、１０００石の板垣退助（土佐）、小松帯刀（薩摩）、吉井友美（薩摩）、伊地知正治（薩摩）と続きます。

毎年給付されるのですが、西郷は辞退するも認められず、これをプールして後年私学校設立の資金にします。

２，廃藩置県

薩摩に帰ってすぐに版籍奉還が実施されます（明治２年６月―１８６９）。西郷は了解していたでしょう。

版は土地のことです。籍は人民のことです。

藩主は土地と人民を天皇に返すのです。

藩主と藩士との主従関係は無くなります。

自治権は藩主に残ります。常備軍も従来通り持ちます。藩主は知藩事と呼ばれます。

幕府時代と実態は変わらず、藩士は藩主に使えて仕事をします。

これは明治４年に実施される廃藩置県施行の一つ前の施策です。

廃藩置県を実行しませんと何のために王政復古を称え、幕府を倒したか

の意味がありません。大久保利通、木戸孝允、板垣退助の志士たちは封建体制を壊し中央集権国家を打ち立てることを考えていたのです。

時期は別にしてさらに民選議院の設立と憲法の発布も考えていました。

これでないと富国強兵は計れず、西洋諸国に対峙できないとの考えです。

やらねばならぬことは廃藩置県です。

明治４年７月（１８７１）に断行されます。

前段階として、断行での士族反乱の恐れから政府に中央軍設立の必要です。天皇の御親兵として薩摩、長州、土佐に兵隊の派遣を求めます。

この頃の政府の要職は太政大臣三条実美（公家）―右大臣岩倉具視（公家）―参議木戸孝允（長州)、大蔵卿大久保利通（薩摩）です。

西郷に上京を求めます。

西郷は御親兵結成のため薩摩の兵３２００人を連れて上京します。長州、土佐からも招集し規模は８０００人となり、御親兵の指揮官は西郷です。

討幕して王政復古はしたのに未だ政府軍がなかったのです。軍は各藩にしかなかったのです。

太政官（内閣）は強化されます。

内閣には参議として西郷、板垣退助（土佐)、大隈重信（肥前）が加わります。

討幕への貢献度合いがあり、これまで薩摩、長州主導で土佐と佐賀が内閣に入っていませんでしたが、二藩を入れての強力布陣で廃藩置県の施行をやろうとしたのです。

中央軍の軍指揮官は大村益次郎は暗殺でいません。西郷隆盛しかいません。

西郷は廃藩置県についての考えがどうなのかそれまではっきりしませんでした。

政府要職の人たちは不安でしたが、西郷はあっさり賛成しました。

西郷は島津久光から廃藩置県に賛成してはならぬと厳命されていたにも関わらず賛成しまた。後年久光より主への裏切り行為として糾弾されま

す。

廃藩置県は中央軍の結成に続き、本番です。

○２６１藩廃止、3府３０２県とする（明治２２年に三府４３県）

○知藩事は解職、県の責任者（県令―知事）は中央政府から派遣する。

○藩の債務は政府が肩代わりする

○租税徴収は政府が行う

○君臣の役は解かれる（主従関係はなくなる）。改めて役人として雇われない限り失職する。

○藩の軍は無くなる。

○士族には家禄（小禄の給付―高給取りほど大幅減）を支給

政府は慎重に進めます。知藩事のほとんどを東京に呼んだ上で、発表します。

不平士族が藩主を立てての暴動を防ぐためです。

廃藩置県が実行されようとしていたことは各藩うすうす感づいていました。ほとんどの藩は財政難で知藩事（藩主）は自治権を中央政府に移管することには賛成でした。

施行は成功しました。

ただ、藩主では薩摩の島津久光（藩父）一人が反対です。

「西郷と大久保はうそをついた。廃藩置県はやらないと約束した。」

どうも二人は討幕で藩兵を京に送るときに、「徳川幕府を倒したら次の将軍は久光様です」と言ったらしいのです。

久光は封建体制が続くと思っていたのです。この後も政府の施策にことごとく反対で政府首脳を困らせます。しかし討幕で最大の兵の提供を許した功労者ですのでみんなでなだめ続けます。

Ⅳ、岩倉遣外使節団出張中と帰国後の西郷隆盛

１，新政策の遂行

政府首脳は思ったより廃藩置県の施行がスムースに実行できたので安心したのか米欧へ使節団派遣を実行します。

幕末に幕府が結んだ不平等条約の改正への交渉のこともありましたが、

視察（勉強）が大きな目的です。

岩倉具視（右大臣）を全権大使に大久保、木戸、伊藤博文等の内閣の重鎮他総勢１００人の視察団です。

国内で騒動が起これば西郷が鎮めてくれるとの安心感があったのでしょう。

後は西郷を首班にしてまかせ、明治４年（１８７１）１１月に出発します。

１０か月の予定が１年１０か月に延びます。国内の安定があったからでしょう。

西郷の行政手腕については疑問視されるところですが、人の提案、意見を聞いて進め決定します。

西郷は政策を自らは提案しません。

そして使節団留守中の明治４年１１月から明治６年１１月、征韓論が通らず下野して鹿児島に帰るまでいくつもの重要施策を実行させています。

地租改正（年貢は米より金納)、徴兵令（国民皆兵、兵は士族の特権でなくなる。３万の兵整備へ)、学制、国立銀行設立、警察制度、太陽暦採用、司法制度などです。

西郷一人の力ではないでしょうが、実質首班（筆頭参議、近衛都督、大蔵省管轄）として申し分ないと言えるのではでしょうか。

２，征韓論と西郷隆盛下野

留守中に大きな外交問題が出てきます。

征韓論争です。明治６年に米欧使節団が帰る前に起こりました。

朝鮮（韓国）は鎖国中です。日本は国書をもって開国を求めますが、国書が徳川幕府時代と様式が違うとして受け取りません。

何度も使節を送りますが返事がありません。そのうち日本人と交われば死刑との布令を出します。

政府部内では在留日本人保護のため軍隊を派遣して朝鮮と交渉しようとの論が出ます。これを征韓論と言っています。

何故開国を求めるかは、このまま朝鮮が鎖国を続けるとロシアの南下政策で朝鮮はロシアの支配になってしまうと考えたからです。そうなれば日本とロシアは対馬海峡を挟んで対峙することになってしまう。

日本では北方では樺太問題でロシアとの交渉が難航しています。

征韓論は参議の板垣退助（参議－土佐)、江藤新平（司法卿―佐賀)、後藤象二郎（左院議長―土佐)、外務卿の副島種臣（佐賀）が積極的です。

西郷は外務卿副島に清国の出方を調べさせ、朝鮮の内部事情（鎖国派と開国派の対立の様子）を調査します。自らも腹心に朝鮮を偵察させます。

そして「自らが朝鮮へ使節として出向き説得する。軍隊は伴わない。砲艦外交はやらない。」と征韓論をまとめます。後年、西郷は征韓論でなく遣韓論という人もいます。

「俺が韓国（朝鮮）で殺されるからそれから軍を派遣すべし」と西郷が言ったとの言は強硬派の板垣を説得するためで、殺されると思っていません。ほかの誰にもこんなことは言っていません。

いわゆる砲艦外交を避けたかったのです。

西郷はこれまで国内でいくつもの外交交渉を成功させてきました。自信があったのです。

失敗したら下野するつもりであったでしょう。

これで閣内をまとめました。そして天皇に奏上の権限を持つ三条太政大臣が「天皇は裁可するが米欧使節団の閣僚の意見も聞こう」とのことあったしました。明治６年８月でした。三条が取り繕ったのでしょう。

あいまいな裁可ですが、西郷等征韓論者は裁可を得たと思いました。

ところが大久保５月、木戸７月に帰朝、そして９月の岩倉の帰りを待って彼らは結束して征韓論反対、西郷派遣を反対します。

朝鮮と戦争になればとても戦費が出せない。今は内政が一番大事。そして清国が朝鮮へ援軍を送ることを予想したのです。

副島種臣（肥前）外務卿は清国より「中国は朝鮮の外交上の失態について責任を取らない」との言辞を得たのです。清国には宗主国意識がないと西郷に報告しました。すなわち清国は援軍を送らない。その頃の清国は内紛があり、朝鮮を支援する余裕はなかったのです。朝鮮は清国の真意を知らなかったのでしょう。西郷はこれを朝鮮との外交交渉で使うつもりであったでしょう。ロシアの南下は朝鮮自身とそして日本や西洋各国との外交で防がなければならないと。そのために朝鮮の開国は絶対であると。

米欧視察団組は１年以上も視察し、あまりにも米欧との文明の差が多きいことに痛烈な脅威を感じました。とても戦争などしている余裕はない。
清国や西洋諸国が干渉してきたらどうするのか。
清国と戦争する戦費はない。

しかし、清国はもう宗主国の位置には実質なかったのです。西洋諸国はむしろ日本が朝鮮を開国させてくれた方を望んでいたのです。
使節帰国組はカルチャーショック状態だったのです。
筆者は、西郷は外交折衝には武力を使わず、相手が使って来た時に使う。そうでなけれ西洋諸国から非難を浴びることを知っていました。

明治６年１０月２３日（１８７３）に逆転、征韓論は却下されます。
太政大臣三条は病気として逃げ、右大臣岩倉が大久保、木戸孝允、大隈重信、大木喬任（たかとう）（佐賀）と共に却下でまとめてしまいました。
征韓論派の西郷、板垣、後藤、江藤、副島は敗れました。彼らは即日辞任して下野します。
これを明治６年の政変と言っています。
西郷は鹿児島に帰ります。
西郷は参議などの辞職は認められましたが、陸軍大将はそのままです。
西郷を師と仰ぐ桐野利明（少将)、村田新八（宮内少丞)、別府晋介（陸軍少佐）と共に近衛兵６００人位が辞して鹿児島に帰ります。兵隊が勝手にやめることが罪にならないのかの問題がありますが、問われなかったのです。

３，征韓論者の下野
西郷など征韓論派が下野した後です。
司法卿であった江藤新平です。
この人は肥前（佐賀）出身です。佐賀は討幕では、薩摩、長州、土佐に比べ討幕への立ち上がりが遅かったため維新で功労者では地位が引くいのですが、行政手腕が高い人が維新政府に起用されます。江藤のほか大隈重信（参議、征韓論反対)、副島種臣（外務卿、征韓論賛成)、大木喬任（参議、征韓論反対）がいます。

江藤ですが下野後に佐賀に戻ります。
不平士族に担ぎ上げられ反乱起を起こします。(明治７年３月)。
西郷にも立ち上げを求めましたが、西郷は応じませんでした。
不平士族の多くは武士の特権を認めよ。封建制度に戻せとの要求ですので、江藤の思想とは異なるのですが、江藤は担ぎ上げられ反乱を起こします。

板垣退助です。
江藤、後藤象二郎、副島らで民選議院設立建白書を政府に提出します。国会の開設要求です。
征韓論賛成と何も関係ないのですが、これが今後の国体形成で必須の事項として在野活動をします。
大久保も反対ではないのですが、現在の一般国民の知的レベルからして時期尚早として、１０～２０年後実施を考えています。
自由主義の表明。在野において民権運動が活発になっていきます。
大久保は閣内に誘い込みます。
板垣は大久保誘いでその後参議に再就任します。

後藤象二郎（土佐)、副島種臣（佐賀）も在野での活動後政府要職に戻ります。

征韓論賛成者のその後は西郷、江藤、板垣などは必ずしも連携して政府にあたろうとしませんでした。
西郷は、江藤の反乱や板垣の運動に乗りません。

Ｖ、西郷下野後の大久保利通（政府）の政策

１，外交

この後は実質大久保首班で伊藤博文と大隈重信が両腕です。木戸は病気がちで表に出てきません。
西郷派の薩摩出身の黒田清隆（北海道開拓次官)、吉井友美（宮内大輔)、西郷従道（弟で陸軍大輔)、大山巌（ジュネーブ留学中)、川村純義（海軍少輔)、伊地知正治（左院議長）は政府に残りました。

残ったこの人たちと鹿児島に帰った人たちと西郷についてはは後記します。

西郷が下野し西南戦争勃発までの明治１０年２月までの３年３か月の間に、大久保政権が行ってきた、施策を追ってみます。

先ず外交です。

大久保は陸軍大輔（陸軍卿山形有朋（ありとも）に次ぐ地位）の西郷従道（つぐみち）（西郷隆盛の弟）主導に引き込まれて台湾出兵を行います。

明治７年４月です。征韓論で止めたのが明治６年の１０月です。

半年前に言った内治優先を主張して西郷を追い出したのは何だったのでしょうか。さすがに木戸も山形も反対しました。

これは明治４年に、沖縄船が遭難して台湾に漂着した時に台湾土民に沖縄の人（日本人）が殺傷された事件があり、台湾を領土と主張する清国に損害賠償を求めましたが、清国より「領土ではあるが蛮人が行た行為として関知しない」との返事があり、外交的にいきづまっていたのです。

これを一挙に解決すべく台湾に西郷従道が指揮官で軍隊を上陸させ、清国も軍隊を派遣しました。

清国と一発誘発の中で大久保が自ら清国に乗り込み、英国の協力も得て苦労の末外交交渉の成功し、賠償金を取りました。

まあ成功と言えるでしょう。

しかし先の朝鮮との外交交渉においては朝鮮は清国の領土ではなく、清国は宗主国の立場です。清国は乗り出してこない可能性はあるのです。征韓論の方が外交上危険が低いことは明らかです。

征韓論よりはるかに危険な賭けでした。

内治優先、戦費がないと西郷に半年前に言ったことは何だったのでしょう。

ただ、沖縄は清国も歴史的に自分の領土と言えないこともなかったのですが、交渉中その主張は清国になく、結果的に沖縄は日本領土が既成事実となりました。

西郷はこの外交には賛成でした。鹿児島士族派遣で弟従道に協力しまし

た。

次に朝鮮問題です。

朝鮮と間に明治８年９月（１８７５）トラブルが起こります。

朝鮮領海江華島付近を日本軍艦が測量中、朝鮮よりの砲撃を受けました。

これに因縁をつけ開国を迫り、ついに朝鮮は開国に応じ、日朝修好条規を明治９年２月（！８７６）に結ぶことになりました。

朝鮮もそして大久保も朝鮮を清国が助けてくれないことがもう分かったのでしょう。

このことは西郷は２年前に、副島外務卿が自ら清国に赴き探りを入れた報告で確証を得ていたのです。そして西洋各国も反対しない、むしろ日本の外交を待っている。

西郷はこの朝鮮との大久保の外交について、「日本軍艦の測量は朝鮮の許可を得ていない。これを理由に非難してでは大義名分がない。まず使節を送って説得が先」と。

この大久保の極端な外交の変更は何なのかです。

視察から時間がたち、カルチャーショックから立ち直って、ヨーロパ外交とアジア外交に差があることを思い出したのか、はたまた征韓論反対は一説にいう西郷追い落としのためであったのかです。

２，士族対策

明治４年の廃藩置県で失職した士族には削減された家禄に応じて秩禄（給与）を支給していました。国家予算の３０パーセントを占め、財政上廃止が求められるようになりました。

対策は行われてきましたが、最終的に明治９年に秩禄処分が行われます。

政府からの秩禄支給は廃止され、数年分の額相当の金額で３０年償還の年金禄公債証書を交付します。

年率５～８パーセントの金利が付きますが、ほとんどの人は最低賃金に

もなりません。抽選で償還が早まることもあります。証書の売買ができます。
多くの士族は売って現金化する人が多かったようです。

廃刀令が施行されます。
これは以前にも出ていましたが、その時は武士は刀をささなくても良いとのお触れでしたが、今回は兵、警官と正装の文官以外は刀や武器を帯びてはいけないとの禁止令です。
これで士族は主従関係はなくなり、世襲の武官でもなく、家禄もなく、刀も持てない普通の一般人となりました。称号だけの士族です。

各地に士族の反乱が起こります。
先に明治７年に佐賀で不平士族が江藤新平を担ぎ上げて反乱を起こし、鎮圧されています。
士族は封建時代の武士の特権をすべて取り上げられ、討幕の兵は我々ではないかとの不満団体が各地に出来ます。しかし彼らだけでは反乱を起こせません。核（中心人物）が必要なのです。一方現政府の岩倉具視―大久保利通の有司専制（このラインで天皇の裁決としてしまう）に対抗する人物が地元で、不平士族に祭り上げられ反乱を起こすことになります。
封建制をなくして、自分たち士族の特権をなくした人物たちを核として担ぐとの理屈は変なのですが、中央で名士である江藤などは担ぎ上げられたのです。

明治９年（１８７６）の秩禄支給廃止と廃刀令は一層不平士族の怒りが増します。
明治９年に熊本に神風連の乱、福岡に秋月の乱、山口に萩の乱が起こります。
しかし小規模で政府はすぐに鎮圧します。
反乱団体より西郷に共に立上りを呼びかけられます。鹿児島でも不平士族が氾濫しています。しかしこの時も西郷は立ちあがりません。
しかし西郷は明治１０年に反乱を立ち上げます。西南戦争です。

VI, 維新政府の行政組織

それではここで維新政府の上部組織はどのようなものだったのかを概容を述べましょう。

維新政府は文字通り王政復古まで長く有名無実であった律令制の太政官制を持ち込みました。

律令制の組織は天皇―関白（摂政）―太政大臣―左大臣―右大臣―大納言―中納言―参議で左大臣以下参議で陣座（閣議）で主要事項が審議されます。

決定は天皇の下で関白、太政大臣、担当大臣で御前会議が開かれ裁決となります。

この下に大蔵省、宮内省、民部省等の八省（長官は卿）等と地方に国司の制度をとります。

維新政府の中央組織は律令制の太政官制を取りますが、簡素化します。関白は廃止です。天皇―太政大臣―（左大臣）―右大臣―参議です。

後の内閣制の閣議と言えるものが太政大臣、左右大臣、参議で行われ、これを正院と言い、決定事項は太政大臣が天皇に奏上し決済を得ます。

当初はこの下に７省（外務、大蔵、兵部、文部、工部、司法、宮内）の行政組織があり、長官を卿とよびます。卿は閣議のメンバーではありません。

太政大臣は三条実美（公家）、右大臣は岩倉具視（公家）で固定、その間の左大臣は島津久光ですが２年ぐらいで辞職、参議は薩摩、長州、土佐から討幕の有力者が任命されます。大久保、西郷、木戸、板垣等です。

省の幹部のトップは卿で以下大輔、小輔、大丞、少丞。これは律令制の四等官制からの呼称です。律令制の省の場合は卿（長官）、輔（次官）、丞（掾）、録（目）となります。輔、丞、録にはそれぞれ大・少があります。

この制度は明治１８年の内閣制度が発足で改変され、内閣は総理大臣（初代は伊藤博文）と大臣で構成されます。大臣は各省のトップです。大臣以下は次官、局長、課長となります。律令の律令太政官制が廃止されました。

軍の職位は将、佐、尉でそれぞれ大、中、少がありますが、やはり律令の四等官制の近衛府と衛門府から名付けています。

西郷が生きている間は大将は西郷のみでした。維新の初めは中将もいませんでしたが、その後山形、西郷従道、川村が中将、大将に昇進します。

地方は封建制から中央集権制に切り替え中で、藩（知事）から県（県令）に組織替えです。

兵部省を解体し陸軍省と海軍省が出来ますのが明治５年、明治６年に内務省（全国知事任命は大蔵省管轄から、警察は法務省管轄から分離独立）が出来ます。

これが正院の職域ですが、このほかに立法府として左院と各省の連絡調整機関として右院を設けましたが、同じようなメンバーであまり有効に作動しませんでした。

古代の律令制をよく復活存続させたものですね。西洋の政体を未だよく知らなったのでしょう。

この制度は明治１８年（１８８５）の内閣制度発足で改変されます。

新政府組織の内閣制（重要事項は総理大臣と大臣とが閣議で決定）が発足します。

内閣は総理大臣（初代は伊藤博文）と大臣で構成されます。大臣は各省のトップです。

内閣制では大臣はそれぞれ外務省、内務省、大蔵省、陸軍省、司法省、文部省、農商務省、逓信省を管轄します。

大臣以下は次官、局長、課長となります。

律令の律令太政官制が廃止されました。

明治２２年年に帝国憲法発布、衆議院、貴族院による議会が設けられます。

Ⅶ、私学校

１，私学校設立

西郷は鹿児島に帰り、私学校を設立します。
設立趣意書のようなものは発表されていないようです。
不平士族の一般教育、軍事教練、就業推進、統制でしょうか。
銃隊学校は西郷と共に帰ってきた元近衛兵（１０００人）が中心です。
賞典学校は、下士官養成の幼年学校です。西郷の鳥羽伏見の戦いでの賞典（褒賞）をプールしていた資金で立ち上げました。
吉野開墾社は鹿児島の西側の台地で開墾に従事します。
私学校は鹿児島各地に１３６の分校がありました。
経費は県が出しました。
生徒は士族がほとんどです。
生徒から県の官吏に起用されます。
私学校は学校なのか西郷党の結党か、軍事組織か。こんな組織に県の歳費を使って良いのかの問題はありました。

２、政府の鹿児島県の治外法権対策
不平士族を分類しますと、廃藩置県（士族の特権廃止）に反対し、封建制の世に戻したい、征韓論の推進と自由民権派の組み合わせとなりますが、鹿児島の不平士族の不満は廃藩置県と征韓論推進の組み合わせでしょう。しかし廃藩置県は西郷が推進した政策です。
西郷は廃藩置県を国策として施行しますが、鹿児島に戻り、県民の２０パーセント（普通の県は５パーセント）の士族（家族を含む）の不満解消に取り組むのです。
人口 70 万人として 14 万人が士族となります。
これが私学校の設立の主たる目的です。

一方島津久光は廃藩置県を認めません。
以前の封建国家のもとで自分が徳川に代わって将軍になるのです。これは京に薩摩兵を送る際に、討幕の暁には久光が将軍にするとの西郷と大久保との約束だからです。
鳥羽伏見の戦いで西郷は勝ったのに自分を将軍にしません。
ずっと怒っています。
維新の元勲（三条、岩倉、大久保）たちも大弱りです。

西郷が鹿児島に帰った後、久光を三条実美太政大臣に次ぐ左大臣のポストを用意して東京に呼び、閣僚に入れました（明治７年）。
しかし封建時代に戻そうとする久光の意見は誰も聞けません。
久光は意見が通らず、怒って鹿児島に帰ってしまいます（明治８年）。

鹿児島県だけは地租を国に納めません。鹿児島県以外の県は県令や県幹部は政府が派遣するのが通常になっていましたが、鹿児島県は久光の意向や西郷の意向で決めます。
西郷はロシアの南下に備えるためと称して実質軍隊を形成しています。

鹿児島だけの治外法権的なこの変則を木戸孝允（たかよし）（維新の三傑の一人、長州のリーダー）は大久保に抗議します。
大久保は県令の大山綱良を呼んで政令通りの県行政の改革を求めます。

明治９年に入り、政府施策は秩禄支給廃止、廃刀令施行を行います。
熊本の神風連の乱、福岡の秋月の乱、大久月の乱、山口の萩の乱と不平士族の乱が起こりますが、鎮圧します。
大久保により廃藩置県に基づき鹿児島県も他の県と同様の行政とするうにとの指令がでます。

３，私学校生徒の暴発
政府施策への反感と他の県での反乱のあおりを受け、鹿児島県の不平士族も反乱をおこすとのうわさが県内外で起こり、これが東京の政府にも聞こえてきます。

政府は対策に乗り出します。
県庁に視察団を派遣します。
更に明治１０年１月初旬に鹿児島出身の中原尚警部以下２４人を密偵に仕立てて鹿児島に送り込みます。
更に１月下旬に鹿児島に陸軍省が保管の武器、弾薬を接収するべく汽船を派遣します。

この二つの施策が引き金になって西南戦争が勃発します。

政府は、反乱が起こるかもしれない鹿児島から弾薬庫の武器、弾薬を回収して東京に運んでおきたい。

これに対し、私学校生徒は反乱を起こした場合（起こそうと思っていた）に備え、武器、弾薬は必需品です。争奪にかかりました明治 10 年 1 月２９日（１８７７）です。

私学校生徒がこの暴挙に出ましたのは彼らの一部に反乱を決めていたからです。

このことを西郷は南大隅の小根占（こねじめ）で２月１日に聞きました。大隅半島の南部で鹿児島湾側です。猟に出ていたのです。西郷の趣味は犬を使ってのうさぎ狩りです。

西郷はこれを聞いて「しもた、万事休す、何事弾薬庫など追盗（おとつ）せん」と言ったそうです。２月３日に鹿児島城下に戻ります。

４，西郷隆盛暗殺計画

密偵の中原尚雄警部以下が逮捕され、西郷暗殺を自供します（２月３日）。

しかしこれは拷問による強制で、真実ではないと西南戦争中も戦後も言われてきました。

中原以下２１名は東京警視庁の密偵です。大警視（警視総監）川路利良（薩摩出身）が送り込むのですが、大久保の指示かどうかははっきりしません。

表向きは私学校生徒に反乱に立ち上げさせないために生徒への個別の説得のためとなっているのですが、西郷暗殺のためとのうわさが東京でもありました。

これが真実かどうかです。

大久保―川路ラインでの陰謀だと言われます。西郷と私学校生徒一派は確信しました。

さてこれは現在でも謎とされています。

○大久保―川路ラインで暗殺説

鹿児島の不平士族は西郷一人を教主のようにあがめて、反乱を起こそう

としている。西郷を殺せば核を失い立ちあがれない。

○非暗殺説

西郷教主説は言えるが、暗殺はその関係者が多く、首謀者が後日明らかになることが多い。

大久保が主犯となれば政府には要職につく多くの薩摩人がおり、ほとんどの人は西郷が大好きで許すわけがありません。

大久保にとって大変リスク。

大久保は征韓論で仲たがいしたとは言え、幼友達で、生死をともにした仲。

大久保は西郷死後、西郷との間について二人を知る者に書き留めさせようとした。(暗殺計画はない)。しかし大久保は暗殺され著述は出ない。

○川路大警視単独説

川路が大久保に図らずにかってに部下に指示して西郷暗殺を謀ろうとした。

これもあり得るが、このような重要な問題を上司に諮らず実行するとは考えられない。

成功しても手柄にならず、罰せられることが大。薩摩出身の西郷びいきが許さない。

外に西郷暗殺を謀ったのではなく、大久保・川路は鹿児島の不平士族を挑発して反乱を起こさせて一挙に叩く作戦を作り上げた。

弾薬を接収すると言えば暴動が起こる可能性大。そして密偵を送って私学校を偵察し、生徒を味方にしようとするとその反動で反乱がおこる可能性がある。

大久保が反乱を挑発させるために行った作戦だったの説もあります。

これは今でも確証を得られません。

Ⅷ、西南戦争

1，西郷隆盛の挙兵

この暗殺計画疑惑を西郷側では計画の確証を得たとして西郷が反乱に立

ち上がる名目、旗印になります。

明治10年２月５日（１８７７）に幹部会が開かれます（2月５日中原警部が暗殺計画を自供後)。

永山弥一郎意見

「西郷が桐野利秋と篠原国幹を連れて上京して暗殺を糺(ただ)す」

桐野利秋意見

「断の一字あるのみ、卒兵上京」

永山弥一郎：元陸軍中佐、幕末の志士、戊申戦争で活躍、西郷を尊敬し、御親兵になるが鹿児島に戻る。私学校には反対。反乱前に西郷と桐野、篠原で上京して糾すとの方法を出しましたが、却下される。
西南戦争では三番大隊長、自決

桐野利秋：幕末の志士活動の時の名は中村半次郎です。人斬り半次郎として有名に、西郷に随身し、明治に入っても用心棒のように西郷につき従う。維新政府で山形有朋と同じく少将になるが、西郷の強い引きよるもの。西郷のお気に入りですが、吏僚としては不向き。
西郷と共に下野、鹿児島で私学校の世話役になる。
西南戦争で西郷を担いだ一番の人。城山で自刃（１８３９～１８７７）

桐野は「命を惜しむやつは出ていけ」とも言ったと言われ、幹部（１１名）の大多数は桐野意見に同調しました。

西郷は決断して言いました。

「そいじゃ、俺(おい)の体を上げまっしょう」

軍勢を引きつれて上京が決まりました。

政府は１月２９日の弾薬襲撃の事件を重大視し、川村純義海軍大輔を艦船高尾丸外２隻で鹿児島に送ります。

川村は２月９日に鹿児島に着き、そこで初めて中原警部の西郷暗殺計画の自供（2 月 5 日）の話を大山県令から聞きます。

西郷に会って言いたい。「東京で詮議すべきこと、この船で東京に行きましょう」と、しかしこのメッセイジは西郷に届かなかったのか、西郷が応じなかったのか西郷は高尾丸に来ませんでした。

川村は湾内での私学校生徒の不穏な動きに危険を感じ出港します。

川村純義：長崎海軍伝習所一期生、戊辰戦争で活躍。海軍中将、
創立の海軍のリーダー。西郷に弟のように可愛がられる。
明治６年政変では政府に残る。

陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原国幹三人連署で県令大山綱良宛に届け出を出しています。

「……今般、政府へ尋問の筋これあり、日ならず当地を発します。……随行多数が出立します。……」

これを受けて大山県令は政府、各府県庁、各鎮台（後の師団）へこの旨を布告しました。

政府への宣戦布告ととれます。

篠原国幹：鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争で隊長で活躍、御親兵として西郷と上京し、西郷の推薦で大佐、少将
明治６年政争で西郷と共に下野、鹿児島で私学校運営に携わる。西南戦争は桐野と共に主戦派の二大巨頭。自決。
（１８３７～１８７７）

大山綱良；幕末、維新後、島津久光に気に入られ鹿児島県の県令になったが、其の後西郷寄りに、戦後政府に処刑される。

２，西郷軍の戦略

① 作戦会議

○一案　長崎を汽船で襲って船を分捕る

所有船に軍艦がなく小型の汽船３隻では進軍は無理からの判断か

らであるが、具体的な戦略がたたず却下される。

○二案　三道分進策

長崎（汽船で）で汽船を分捕る。

日向（宮崎県）、豊後（大分県）、豊前（福岡県東部・大分県北西部）へ陸路進軍し、そこで汽船を奪い、土佐に入って、同志と合流）。

熊本へ進軍、北上し本州へ。

土佐の同志と合意されていない。勢力分散となることで却下される。

○三案　全軍熊本へ進軍、北上し本州へ。

第三案が採用されました。
反乱の準備ができておらず、一案、二案では無理と判断したのでしょう。
意見が割れたようですが、最後は西郷が決めたのでしょう。

この後西郷は作戦にはほとんど口を出さず言われるままがほとんどです。
西郷軍は１万３千人の大動員です。戦略、戦術を練る優秀な参謀長はいません。

② 西郷隆盛の参謀

西郷は軍勢の統率者としては抜群の器量の持ち主の指揮官・大将ですが、戦略、戦術は自分では立てません。才能ある部下にまかせます。
戦略とは戦争遂行のための軍勢規模、武器・弾薬・兵糧の調達、攻撃目標の設定、攻撃の隊形、防禦地の造成、自軍領地の防衛を個別に総合的に作り上げることです。
戦術は戦略に基づき、個別の戦闘での戦闘力の使用方法。これは現場指官に委ねられます。
兵の統率力が大事になります。

西郷は鳥羽・伏見の戦いでは総大将でしたが、参謀は優秀な長州の大村益次郎、薩摩の伊地知正治や吉井友実です。討幕軍が勝ったのは三人の功労と戦後高い評価を受けます。

西郷は苦戦でも前線を動かず全軍を引かさず叱咤激励します。前線指揮官として高い評価を受けます。又東征軍の実質大将として幕府側の勝海舟と江戸城無血開城で戦勝します。外交術に長けています。
このことは当時の人たちは知っています。西郷も自分の強みを知っていました。

しかし西南戦争では戦略を練る優秀な参謀がいません。
参謀は。勝てる戦略、戦術を編み出し、大将が絶対信頼出来る人でなくてはなりません。
有名な例は日露戦争での満州軍総司令官大山巌元帥の参謀児玉源太郎、連合艦隊司令長官東郷平八郎大将の参謀秋山真之が有名です。二人の参謀の頭のキレは誰も認めるところでしたが、指揮官との信頼関係が大事です。

この時、下には誰でも認める戦略に長けた人がいなかったのです。
鳥羽伏見、戊申戦争でまあまあ活躍した桐野も篠原も戦略が立てられません。現場の指揮官として西郷はかっていました。
進軍作戦三案の内、熊本へ全軍進軍は西郷が選びました。

3，西郷軍の編成。
兵力は約１万３０００人、私学校生徒と外城士（郷士）が中心。
１～５番大隊　隊員各２０００人規模、各小隊１０隊（各２００人）
独立大隊　６・７番隊　隊員各１０００人規模
総指揮　西郷隆盛（陸軍大将　５１歳）

1番隊　指揮長　篠原国幹　（少将　42歳）
２番隊　指揮長　村田新八　（元宮内少丞　42才）
3番隊　指揮長　永山弥一郎　（元中佐　４０歳）
４番隊　指揮長　桐野利秋　（少将　４０才）
５番隊　指揮長　池上四郎　（元少佐　３６才）
６・７番隊（独立大隊）　指揮長　別府晋介　（元少佐　３１才）
外に砲隊２個小隊（４００名）

この外に西郷を慕う熊本県や宮崎県の有志が隊を結成して西郷軍に加わる者がおり、私学校生徒や外城士の１万３０００人に加え合計３万人になったと言われます。しかし一挙に投入でなく間隔があり、県外の兵士はどこまで戦力になったかよく分かりません。

4，西郷軍の装備

銃の主力はエンフィールド銃（弾を筒の先か入れます）１万丁、旧式銃です。発射間隔が３０秒かかります。

新式の元込めのスナイドル銃は３０００丁。１５秒に１発発射できます。

弾薬は一人１００～１５０発携行

大砲は１６門、一説では60門

兵力はその後熊本県、宮崎県の不平士族が集まりましたが、その人たちの内何人が銃を携帯していたのかも分かりません。

5，政府軍の軍容

開戦時の九州の兵力は熊本鎮台（ちんだい）の６０００人ですが、小倉に１５００人が駐屯していますので熊本城には３５００人です。

開戦と共に各地の鎮台から選抜のほか新たに兵を徴発して旅団が順次結成され九州に派遣され、最終的には６万人体制にします。

当時地方には仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本に鎮台（ちんだい）を置き、兵を駐在させていました。１鎮台が６０００名で下に３連隊（各２０００人、)、

その下に大隊、中隊、小隊の編成です。鎮台兵の兵卒は徴兵の兵です。後の師団です。外に近衛兵（６０００人）がいます。士族出身で構成されます。

西南戦争には警視庁（巡査）も参戦します。新規に兵を徴発します。

銃は元込め（後装式）最新式のスナイドル銃が中心、大砲は１１０門以上。

海軍は軍艦１９隻、汽船４４隻、民間船８５隻（兵員輸送、武器、弾薬の運送）

電信の電線は東京、京都、大阪、熊本につながっていますが、鹿児島まではつながっていません。東京からも九州に展開する味方同士は電信で連絡が即時に取れます（当時は無線電信はなし）。熊本では薩摩軍が電線を切りました。

６，熊本鎮台（ちんだい）（熊本城）攻撃

２月１４日に別府隊が先陣で出発です。２月１５日に一番隊と二番隊の一部、１６日が三番大隊と四番大隊、１７日に五番隊と砲隊、四番隊、同日西郷と護衛、二番隊と砲隊です。

この後の西郷軍の進路は後掲地図を参照ください。

２月１９日に政府は征討令をだします。総督は有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王。

西郷、桐野、篠原の三人の官位をはぎ取ります。

２月２０日、別府隊２０００人は熊本城下の７キロメートルまで接近します。

政府軍鎮台兵は熊本城から出て夜襲をします。小さい戦いですが、政府軍（鎮台）の失敗です。

西郷軍の幹部は、熊本鎮台は攻撃せず、もしくは西郷軍に協力して北上させてくれると期待していたようです。

絶対とは思っていなかったでしょうが、思惑は外れました。

鎮台の幹部は、

鎮台司令官　少将谷　干城（土佐）

参謀長　中佐樺山資紀（薩摩）

連隊長　中佐上倉知実（薩摩）

　　少佐川上操六（薩摩）

彼らは内応しません。政府軍として戦う決意です。

内応を期待されていた薩摩出身の樺山は「大義名分のない西郷軍は私事。通過することは許さぬ」。

西郷も熊本に到着します。

２月２２日西郷軍は熊本城を総攻撃します。

籠城の熊本鎮台３５００人対し３倍の兵力で攻めました。激戦でしたが、落ちません。

鎮台側の砲力が圧倒的で、小銃の性能が西郷軍より優秀です。西郷軍が１発撃つ間に鎮台兵は３発撃てます。一兵の威力が３倍です。もちろん堅固な城壁で守られています。

７，田原坂（たばるざか）の戦い

西郷軍はその日に作戦会議を開きます。

城攻撃続行の意見もありましたが、

「強襲は中止、軍の一部（３５００人）で熊本城を囲んで鎮台兵が城か出てきたらたたく。残りの軍は熊本北方の高瀬～植木方面で南下の政府軍を待ってつぶす。」

主戦場は熊本県の北西で福岡県との県境近い山間部植木（東側）と高瀬（西側）の間（１２キロメートル）の数か所での戦いとなり、間に有名な田原坂があり激戦地となります(熊本城から直線距離で１５キロメートル)。後掲地図を参照ください。

２月２２日の植木での戦闘から３月２０日までの戦いです。

既に植木では先鋒同士の戦いで政府軍の軍勢が整わず政府軍は負けます。乃木希典中佐が連隊旗を奪われて敗戦します。

23 日には西郷軍主力が植木へ、しかし政府軍も増強（船で兵を博多へ）し政府軍は優勢になっていきます。

高瀬川の戦いでは西郷の末弟小兵衛が戦死します。

この後いよいよ田原坂で戦闘です。

田原坂の地形です。

小丘陵で、道路が丘陵をえぐる様に通っており、道は曲がっています。

道路が自然の塹壕になっています。距離で２キロメートル位です。

道幅４メートル位です。

西郷軍は曲がり角ごとに塁を１０数か所築き、登ってくる政府軍に対抗

し、ここで政府軍を壊滅させ、南下を防ぎ、西郷軍は北上して福岡に向かう作戦です。

主戦場は田原坂ですが、戦場は田原坂中心としたと東西２キロメートル四方で展開されます。

何回も戦いがあり、激戦でしたが、政府軍が大砲の量、銃の優秀性で西郷軍を圧倒し始めます。

雨の日もあります。西郷軍の大半が持つエンフィールド銃は雨の日は使いにくいのです。

一番隊の指揮官篠原国幹（桐野と共に西郷の片腕）が戦死します。

３月２０日の政府軍総攻撃で田原坂の戦いは政府軍が勝利します。

西郷軍は田原坂より撤退です。

８，日向（宮崎県）へ転進

三番隊の指揮官永山弥一郎は熊本城攻城担当でしたが、南下敗軍を組み入れます。

これより前、田原坂で戦闘中の３月８日より１２日に、政府は軍艦４隻、汽船５隻計９隻をもって錦江湾から陸兵７００人、警官７００人上陸させ、黒田清隆（陸軍中将）が中原警部以下を受け取り、大山県令を長崎へ連行しました（戦後処刑される）。

西郷軍の軍資金、糧米、３万石、弾薬１年分、を没収。

鹿児島が全く無防備であったことがわかります。

政府軍は熊本城に向け南下します。

更に熊本城の南西の南須口の浜に兵を上陸させ八代（熊本城南方、西郷軍兵站基地）で決戦し政府軍は勝利します（４月１２日）。三番隊指揮官永山弥一郎は自刃します。

政府軍は４月１５日、熊本城開城に成功します。

西郷軍は本営を熊本城東方１０キロメートルの木山に移します。

４月２０日、木山で決戦、西郷軍８０００人、政府軍３万人、兵力差で西郷軍は負けます。

西郷軍は、西郷は人吉（熊本県）へ、野村忍介（四番大隊小隊長）は豊後方面へ、別部晋介（六・七番隊大隊長）は鹿児島方面へ、辺見十郎太（三番大隊小隊長）は大口・水俣方面へと分散します。

人吉の西郷は攻められ４月２９日に宮崎に本拠を移します。以後６０日間宮崎では戦いがありません。

豊後方面の野村忍介が善戦します。

７月初め大口・水俣（熊本県）の辺見軍も敗戦、日向に向かいます。

５月５日別府隊が鹿児島を急襲し政府軍と攻防、しかし６月下旬に宮崎に退きます。

７月初め、西郷軍は、宮崎（西郷・別府）を基点に、北の延岡は野村忍介隊、南西の都城方面は村田隊の３拠点（宮崎県）の展開となります。

政府軍６万人、西郷軍１万人

７月２４日より政府軍は各拠点への攻撃です。

都城、宮崎と政府軍が順次勝利し、占拠します。

西郷は延岡へ向かいました。

８月１４日政府軍は延岡を総攻撃です。西郷軍は敗退です。

延岡の北、可愛岳（えのだけ）のふもとの長井村で軍議します。西郷軍は４０００人か２０００人になっていました。

長井村で負傷していた西郷の息子菊次郎は投降し、叔父の西郷従道に保護されます。

８月１６日、西郷判断で全軍解散を布告します。大半が降伏します。

それでも私学校生徒中心に５００人が残ります。

政府軍の包囲を突破して、可愛岳（えのだけ）（標高７００メートル）山中を強行して８月２１日に、三田井（宮崎県北部、熊本県境に近い山奥）に到達します。

ここから宮崎県の山並みを縦走して南の鹿児島へ向かいます。

何故鹿児島へ向かったのかはっきりしません。

再起のためか、いやそうではないでしょう。西郷は死に場所を故郷鹿児島にしたかったのでしょう。ほかの人は西郷と共に死ぬ、西郷が生きている限り西郷につき従う意思を持つ西郷隆盛教信者でしょう。

9，城山決戦

９月１日に西郷軍は鹿児島に着きます。

三田井村から鹿児島への西郷軍の彷徨については、政府軍はつかめませんでした。

鹿児島での政府軍は手薄でした。７００人と海軍兵１００人でした。

西郷軍３７２人は鹿児島を急襲して私学校跡、それに続く城山を確保し要塞を造ります。

政府軍は鹿児島に兵を集めます。５万人以上です。

総大将は山形有朋（陸軍卿、参軍、中将）は９月９日に鹿児島に着きます。

西郷軍の城山の要塞への総攻撃は９月２４日とします。

西郷軍の中で政府軍に対し、西郷の助命嘆願の声が出ます。

西郷と桐野は認めませんが、河野修一郎と山野田一輔（いつぽ）が暗殺計画を訴えるだけと言って総攻撃の前日に参軍川村純義（海軍中将、薩摩）に面会します。

二人から「西郷暗殺計画の究明を」訴えます。

川村から

「大久保と川路、を告訴すればよいこと。開戦前、鹿児島港に入り、西郷との対面を申し入れたのに私学校生徒が軍艦を襲うとした。そして会わせなかった。西郷に言うべきことがあれば本夕５時までに回答せよ」

山形有朋書状と「息子の西郷菊次郎は無事の報」を山野田に託します。

河野は拘束されます。

山形の書状の概略は「君*自ら図って（自決)、挙兵が君の意志ではないことをあかすべし」と。

山形の書状は長文で、美文とされています。汚職事件を救ってくれた西郷、一方若い時から可愛がってもらった川村、今、陸軍、海軍のトップに

あるのは西郷のおかげです。
いかばかりの気持ちだったでしょう。
＊君は当時は敬意をこめた語
西郷は返事を出しませんでした。

２４日午前４時、５万人による総攻撃です。西郷軍は３７０人です。
西郷軍は陣地の中腹から麓の政府軍に突撃しようとしましたが、銃弾をあび次から次へ倒れます。
西郷が股部に銃弾を受けます。午前７時西郷は別府に介錯を頼んで自決します。享年５１歳
村田新八は自刃、別府と辺見は刺し違えて死にます。桐野、池上、山野田も堡塁で自刃します。
城山の戦いは終結です。

西郷軍の戦死者は１６０人で野村ら２００人が投降しました。

10、終戦
西南戦争は終わりました。
熊本城下での戦いの２月２０日か約７か月に及ぶ期間です。
戦死者数は、西郷軍５０００人、政府軍６８００人でした（戊辰戦争では新政府軍の死者は３５００人幕府軍４６００人）。
最後の城山での戦いは、たいした堡塁もなく、装備もない３６０人位に５万人で囲み、集中砲火と銃撃です。
西郷は降参しません。
こんな戦闘は戦国時代にもありません。こうなれば城の大将は兵の助命を願って切腹、降参します。又は、兵を置き去りにして城を脱出します。
西郷は実質戦死まで戦います。
残る人へ降参するようにとは言いません。
名だたる幹部は戦死、自刃しますが、西郷死後降参する者も２００人位います。
８月１４日の延岡での大敗で西郷は軍の解散の布告を出しています。
西郷を教祖と仰ぐこの最後の集団（軍）は西郷が降参するか死なない限

り戦うのです。

この集団は教祖西郷隆盛を仰ぐ宗教団体なのでしょうか。

普通の軍団ではないようです。

ただこの人たちは生きて西郷教を広めようとはしません。

西郷遺訓は残っていますが、死後宗教にも思想団体にもなりませんでした。

西郷は共に死にたい人は止めません。

西郷の死生観は難しいですね。

西郷隆盛は官職を剝奪され逆賊の汚名を着せられました。

息子の菊次郎は叔父の西郷従道に保護され、後年京都市長になりました。

政府軍に拘束された使者河野も生き延び、後年青森県知事になりました。

IX、西南戦争の勝因と敗因

1，政府軍の勝因

① 近代的装備

大砲の量による敵陣破壊力の威力、最新式の元込め小銃の装備（西郷軍の先込め銃の３～４倍の速さで発射）

鉄道、軍艦、汽船による兵員、武器弾薬、兵糧の運搬、電信の活用

② 兵員の数と戦いに慣れていた兵

全国から徴兵、徴募できる兵の数

不平士族の反乱で戦いに慣れていた兵。

台湾征討で陸海軍合同戦を経験している。

戦士として鎮台兵は刀の扱いでは士族に数段劣るが、銃の操作は数か月で一応取得できる。戦闘の主力戦は刀でなく銃撃戦。

③ マスコミの利用

政府軍の正当性をアピール。

平民は平民の鎮台兵の活躍を喜ぶ。

２，西郷軍の敗因

① 西郷の暗殺計画を糾すだけで兵を起こすは、私的なことで兵を起こしたことになる。

政府の政策上の非を訴え、国政はこうあるべきだと大論を掲げなければならない。大義名分がない。

② 戦略がない。

西郷が立ち上がれば鎮台兵が味方して西郷軍に協力してくれると思ったか。

更に九州全体のまたに日本全国の不平士族が一緒に立ち上がると思ったのか。

それならば事前に呼びかける必要がある。戦国大名でも立ち上がる時はこれは必ずやる。

出ないと一斉蜂起となって政府を倒せない。

全国の不平士族の規模が小さい、各県の警察はしっかり見張っていた。

倒す気がなかったのではないかとの意見もある。大久保外２，３人の首のすえかえだけが目的か。西郷が政府を倒しても西郷の抱える鹿児島のスタッフでは新政権の要職をこなせる人材はほとんど数人しかいない。

③ 軍の装備

政府軍が持っている新式のスナイドル銃（元込め）がほとんどなく、旧式の筒の先から弾を込めるエンフィールド銃が中心。装填に３～４倍の時間がかかり、雨天は使いにくい。

弾薬不足

食料不足

通信戦が熊本までで、鹿児島には未設置（遠征隊と熊本の連絡な陸路だけ）

④船舶がないに等しい。

軍艦なし、汽船は小型船が３隻

兵員や弾薬、食料の運搬は陸路だけ。
九州から本州へはどうするつもりだったのか。
仮に長崎、博多や門司に陸路到達して、船を奪おうとしても、船は沖合に避難するであろうし、小船を奪っても軍艦に撃沈されてしまう。
西郷軍には軍艦が１隻もない。

④ 鎮台兵の力
侍が得意とする刀での斬り合いは主でなく、さして訓練がいらない銃撃戦が主体であるため、人数と銃の性能に威力

⑥本拠地の備え
鹿児島の防禦なし。
簡単に政府軍に制圧される。

⑦参謀スタッフ
有力な参謀がいない。
西郷自身は参謀の役はできない。これまで戦は薩摩の伊地知正治、吉井友美、長州の大村益次郎が参謀を果たしてきた。

X、西郷隆盛を取り巻く薩摩の志士たち
1，志士として同格で幼友達、親友、西郷が兄貴分―政府派
○税所（さいしょ）　篤：西郷が奄美大島に遠島中も支援、戊辰戦争で活躍。西南戦争の時は、天皇側近（１２７～１９１０）

○伊地知正治：鳥羽伏見の戦いでは西郷の参謀、参議、西南戦争の時は宮中顧問官、征韓論派（１８２８～１８８６）

○大久保利通：維新の三傑の一人、征韓論で西郷と袂を分かつ（１８３０～１８７８）

○吉井友美：鳥羽伏見では西郷の参謀、西南戦争の時は宮内大丞（１８２８～１８９１）

明治６年の政変では大久保もちろん、他の３人は下野せず、政府に残り、西南戦争では政府側（大久保派）でした。

討幕の同格の同志が政府側についたのはやはり無謀な反乱だったのでしょう。

３人とも西郷は大好きでした。しかし彼らは西郷と同格の意識があり、無謀な西南戦争について行かなかったのです。彼らは戦を知っています。

鳥羽伏見の戦いは参謀伊地知と吉井の作戦の結果と言われています。

２，政府派になった親類の志士たち

○西郷従道（つぐみち）：西郷の１５歳年下の弟です。侍として志士としての振る舞い全てを教わり、東京では兄の日常の世話も良くしました。
兄に面と向かって逆らうことはありませんでした。
明治６年の政争では下野せず、西南戦争では陸軍卿代理のとして政府軍で戦いました。
この戦いのやり方は兄に非があり、まったく兄に勝ち目がなく無謀と考えたのです。（１８４３～１９０２）

○大山　巌（いわお）：西郷隆盛とは従弟(１４歳下)、西郷隆盛、従道兄弟とは親密、明治６年の政変の時はヨーロッパ留学中。
西南戦争では従道と同じ考えで、政府軍として戦いました。
日露戦争で満州軍総司令官として勝利したことで有名です。(1842～1916)

二人は戦後政府の重鎮として要職に就きます。

末弟の小兵衛（２３歳）と息子の菊次郎（１７歳）は隆盛のそばにいたこともあり、西郷軍に入りました。小兵衛は戦死です。

仲の良い弟、従弟、そして同格の元志士たちが隆盛に味方せず、政府軍（大久保）についたことはこの戦いの西郷の無謀さを物語るものでしょう。

３，西郷の後輩、弟子の志士たち

西郷派と政府に分かれます。

A,西郷派

○桐野利秋：前掲（Ⅷ西南戦争１，挙兵）

○篠原国幹：前掲（Ⅷ西南戦争１，挙兵）

○村田新八：西郷と共に遠島処分になる。西郷の秘書的存在。岩倉使節団に加わり欧州留学。大久保の期待の人でもあった。
西郷との深い関わりから西郷を追って鹿児島へ。
西南戦争を止めるに至らなかった。城山で戦死。（１８３６～１８７７）

○永山弥一郎：前掲（Ⅷ西南戦争１，挙兵）

○池上四郎：若い時から西郷に教導を受ける。鳥羽伏見、戊辰戦争で活躍。征韓論前に西郷の指示で満州偵察。西郷について鹿児島へ。城山で自刃。（１８４２～１８７７）

○別府晋介：桐野の従兄で仲が良い、西郷には桐野が引き合わせたか。
西郷に連れられて御親兵大尉、征韓論前に朝鮮を偵察。
明治６年の政変後西郷と共に鹿児島へ戻る。城山で西郷を介錯した後自刃。（１８４７～１８７７）

いずれも西南戦争で大隊長をやった西郷軍の最高幹部です。西郷の弟子のような存在で、西郷を追随し、西郷教の信徒のような人たちです。

篠原と村田は軍を起こさず、西郷が大久保と川路を糾す手順を踏もうとしましたが、桐野と篠原が議論を先行し、もう止めることができず、西郷が決断してしまいましたので、戦いの先頭に立ちました。

B、政府派（大久保派）

〇川路利良：明治政府で西郷に引き立てられ大警視（警視総監）になる。
明治６年の政変では私情を捨てて警察に献身するとして下野せず。大久保の忠実な部下となる。鹿児島での私学校生徒の不穏な動きを察知して偵察の部下を送る。西郷暗殺計画との嫌疑が出てくる。
西南戦争の２年後に病没（１８３４～１８７９）

〇川村純義：若いころ西郷に弟のように可愛がられる。
長崎海軍伝習所一期生、戊辰戦争で活躍。明治６年政変では政府に残る。西南戦争制止のため艦船で鹿児島に出向くも西郷に会わしてもらえず帰る。（１８３６～１９０４）

〇黒田清隆：幕末は志士活動で西郷によく協力。維新政府では北海道開拓に尽力。西南戦争では政府軍として熊本城解城に成功。
大久保没後は薩摩の重鎮として後年総理大臣になる。

西郷の薫陶を受け世話になった政府の役人、軍人になった薩摩出身者は大勢いますが、川路はお世話になった西郷を本当に殺そうとしたのでしょうか。

川村は子供のころから可愛がってもらった西郷の反乱を止められなかったことに悔いは残ったでしょう。担いだ桐野を恨んだでしょう。

XI、西郷隆盛の功績

ここで西郷隆盛の幕末、維新での功績、功労をまとめます。

１，幕末

いずれも出馬を求められた戦の指揮、対外交渉です。

ⅰ，禁門の変
　　薩摩全軍の指揮官
ⅱ，長州征伐
　　征討軍の参謀格
ⅲ，鳥羽伏見の戦い
　　討幕軍全軍の指揮官
ⅳ，戊辰戦争
　　江戸、東征の指揮官、江戸城無血開城

２，維新政府
ⅰ御親兵（近衛兵）創立に寄与　薩摩より兵３千を天皇直属の兵にする
ⅱ警察制度発足に寄与　薩摩より２千人を派遣
ⅲ廃藩置県推進に賛成し、寄与
ⅳ参議‘（後の大臣）となり、中央政府軍の総大将。

３，岩倉遣外使節団出張中
ⅰ地租改正
ⅱ徴兵令
ⅲ学制
ⅳ国立銀行設立

　廃藩置県の実施や徴兵令の実施は西郷の政府軍結成と統率力が必要でした。
　薩長土佐の関係者は薩摩に引っ込んでいた西郷を引っ張り出しのです。
　ここまで幕末、維新政府への功労は西郷が一番と思えるのですが。
その最大功労者が征韓論後４年後に政府に反乱して西南戦争を起こし、亡くなります。
　　敗れて賊軍になりましたが、その後も政府関係者、知識人、一般国民から人気が衰えず、政府はその後赦免、名誉回復大将号復活させました。

Ⅻ、福沢諭吉による反乱への批評

1，政府責任

暗殺計画があったかどうかは分かりません。そんなものがないとしても政府は責任がある。

西郷が下野して鹿児島へ帰るについて、西郷は辞職でも、免職でもない。

一緒に鹿児島に戻った兵も法に従っていない。制止せず、黙認。

西郷には大将の給与を支給続ける。

鹿児島県の歳入は中央政府には入らない。これは鹿児島の私的兵士に俸禄を与えていたことになる。

鹿児島は独立国の体、政府が二つあるようなもの。

武器製作の場を鹿児島に設ける。

３～４年前から鹿児島が穏やかでないことは分かっていた。西郷がいるから安心と、西郷だけに頼った。

2，反乱への西郷の非なる所

部下の腕力を抑えきれなかった。

武器製造所は政府に返還すべき。

「政府に糾すことあり」（西郷暗殺計画）では私的なことで大義名分にならない。薩摩人の人民の権利、政府圧政のひどさを云うべき。

西郷は不*学。学問の思想がない。

＊西洋思想の学問がない意味でしょう。西郷が陽明学、禅学を修めている。

武力でなく議論で、文を修め、智をみがき、工を勧め、業を励み、民選議院を設け、立憲政体を作る思想を持つべきであった。

福沢諭吉は総じて西郷へは好意的です。西郷は政府転覆を図ったのではない。大久保と数人の政府要人への反抗であると。

一方西郷の福沢へのコメントはないのですが、福沢の「学問のすすめ」は読んでいたようです。

XⅢ、当時の知識人の西郷隆盛評

西郷の功労は薩摩はもちろん長州、土佐、佐賀の討幕派の元志士の要人たちは認めるところで幕府側の多くの人にもその清廉潔白の人士として

尊敬され一般の人々からも敬愛されました
しかし西南戦争で逆賊となりました。
当時西郷を知る人たちが彼をどう見ていたのか見てみましょう。

○伊藤博文
長州出身、幕末は木戸孝允につき、維新政府では木戸と大久保の調整役、木戸、西郷、大久保亡き後は維新政府の第一人者、明治の元勲と称せられる。
評「徳望もなかなかあったが、政治上の識見如何と云うとチト乏しいようだ。大人物であったが創業的な豪傑で守成の人とは云えない。」

○板垣退助
土佐の第一人者、征韓論派、下野した後政府に戻る。民権論者
評「公明正大の人、民選議院設立にも賛成してくれた。武断家ではない。」
「熊本城といううさぎのわなに突っ込んだ」

○内村鑑三
名著“代表的日本人”で評します。
評「『敬天愛人』を奉ずる勇敢なサムライ。維新の創設者。鍛えぬいた意志力の強さ。経済、内政に弱い。」

○大久保利通
維新三傑の一人、西郷と幼馴染、西郷が兄貴分
評「西郷は従来甚だ感情に敏く、いわゆる多感の丈夫なり。禅に陥ったことは良くない。
「暗殺しようとしたとのうわさがあるが、自分はこれまでどんな困難の時もそのような手段を使ったことはない。」

○大隈重信
佐賀出身、抜群の行政手腕、後に総理大臣を２回。西郷と仲が良くない。
評「(閣議）では「吏員を更迭すべし，新奇の人を用ゆべし」が主要となっ

て、政治論は第二議となる。行政の能力を有するや否や.」

○勝　海舟

幕臣、西郷と江戸城無血開城で合意、

評「おれは、今まで恐ろしいものを二人見た。それは＊横井小楠と西郷南洲だ。

西郷におよぶことができないのは、その大胆量と大誠意とにある。

“ぬれぎぬを　干そうともせぬ　こどもらが　なすがままに　果てし君かな“　海舟」（暗殺計画を　明らかにしようとせぬ　私学校生徒等の

なすがままにさせて　果てた君（西郷））…・著者の訳

＊幕末福井藩（藩主松平春嶽）の政治顧問、明治政府に参与で出仕、明治２年暗殺

○木戸孝允（たかよし）（桂　小五郎）

長州の代表者、維新の三傑の一人。

評「忠実寡欲臨時有果断、西郷は尊氏のような奸悪ではない。惜しむなく識乏しく時勢を知らず、一朝の怒りを洩らすに己の長とするところ以て身を亡ぼし、又国を害するものなり。西郷憎むべしといえども憐れむべき。」

自身が死ぬ５月 26 日の少し前に“西郷、もう大抵にせんか”

○渋沢栄一

幕臣、財界の人だが、一時政府に勤務した。

評「大西郷は余りにも仁愛が過ぎて身を誤らせるに到ったと言わざるを得ない。」

○島津斉彬

前藩主、西郷を抜擢、西郷は斉彬を主とも、師とも仰ぐ。

評「私、家来多数あれど誰も間に合う者なし。西郷一人は薩国の大宝なり。しかしながら彼は独立の気象あるが故に、彼を使う者は私ならではあるまじく」

○新渡戸稲造
名著“武士道”の作者
評「典型的なる一人の武士」

○山形有朋
長州出身、維新政府で、陸軍畑、行政にも長ける。後年総理大臣２回。
汚職疑惑を西郷に助けられた。
評「幕末の薩長連合も維新の廃藩置県も西郷のおかげである。」

○島津久光
薩摩藩で藩父と言われた実力者。
評「西郷は裏切りをする。島から戻すのではなかった」

○福沢諭吉
文明論の大家、教育者、民権論者
自著“丁丑公論（ていちゅうこうろん）”で西郷評を記しています。
評「武人であるが、大人の風采がある。
大事変に際しても余裕がある。
士族の気風を重んじているが、封建制度に執着する者ではない。
西郷は政府全体を転覆する者ではない。数名の高官を攻撃するだけでる。欠陥は不学であること。思想がない（儒教、禅学が修めているので西洋の政治、経済について無学の意味でしょう）。」

○大山巌
西郷の従弟、西郷の薫陶を受けて育つ。
評「あの人は私欲がなく、まことにみごとなものであったが、ただ人欲というものがあり、それがかつがれるはめになり、身を誤らせた」

○伊地知正治
薩摩出身、西郷とは同格の同志、戊辰戦争の時の参謀
評「桐野ような男に乗せられて」

ＸＩＶ、西郷隆盛の心情、信念

庄内藩藩士が薩摩に留学して西郷から教えを受けた内容を西郷亡き後「西郷南洲遺訓」として発刊されたものです。

４１項目ありますが、その中でよく知られた３項目の要約を記します。

庄内藩は幕末江戸の薩摩屋敷を焼き討ちした薩摩藩と敵対関係にあり、新政府軍と抗戦しましたが、最終的に降伏しました。

厳しい処分が下されると覚悟しましたが、西郷の予想外の寛大な処置、礼節極まる態度、武士道を重んじる態度に尊敬と感謝の気持ちを持ち続けました。

西郷の信念を大事にして発刊したものです。

①敬天愛人

西郷の理想とする言葉でしばしば揮毫（きごう）にしました（額などに書く）。

「天を敬い、人を愛す。」

大いなる天（自然の摂理）に敬意を払い、大切にする。他人を思いやり、愛しなさい。

天は他人も自分も平等に扱い愛してくださる。それと同じく自分を愛する心を以て他人を愛することが大事である。

②人を相手にせず天を相手にせよ

自分自身の精一杯を尽くし、人の非をとがめるようなことはしてはならない。

③命もいらず名もいらず、始末に困る人

命もいらぬ、官位や肩書も金もいらぬ、という人は扱いに困るものである。だがこのような人でないと、困難をともにして国家の命運を分けるような大きな仕事を一緒に成し遂げることはできない。

志士と呼ばれた人たちが新政府で役職を求め、高給を取り、蓄財に走ります。これを嘆いたのです。

天とは自然の摂理のことか、天地万物の主宰者か、キリスト教のゴッドのようなものかはっきりはしません。

ＸＶ、後日談

１，大久保利通と川路利良の死

大久保は西南戦争の翌年明治１１年５月東京紀尾井坂（千代田区）で馬車を襲われ惨殺されました。

大久保の暗殺は犯人やその他から予告があったにも関わらず、警備を強化しませんでした。犯人は征韓論者で石川県士族島田一郎外７人です。

大警視（警視総監）川路の痛恨ミスです。

かくて明治維新の三傑は明治維新の１０年、１１年に立て続けに没しました。木戸孝允４５歳、西郷隆盛５１歳、大久保利通４９歳でした。

尚、川路は明治１２年フランスのパリへ出張中に発病し、急遽帰国し１０月に死亡しました。

大久保を後ろ盾に治安警察を創設した仁です。元々この職には西郷が抜擢したのです。

２，西郷隆盛の上野の銅像

西郷が亡くなった時政府は国賊とし、マスコミも西郷非難の論調が多数だったのですが、その後、旧幕府関係者、政界、インテリから西郷擁護論が出、国民一般も西郷の遺徳しのぶ声が出てきます。

明治２２年（１８８９）も憲法発布の大赦で正三位に復位します。

西郷隆盛の銅像を建てようとの声が出てきます。

吉井友美（薩摩、幼馴染、西郷の同志）が関係者に声をかけ、樺山資紀（かばやますけのり）（薩摩、文部大臣)、が建設委員長です。

明治３１年（１８９８）１２月に上野公園に建てられた銅像の除幕式には８００人の関係者が集まりました。

除幕委員長　川村純義（薩摩　伯爵)、祝辞　山形有朋（長州、元総理大臣)、列席　西郷従道（弟)、大山巌（従弟)、黒田清隆（薩摩、元総理大臣)、

アーネスト・サトウ（駐日公使)、勝海舟、榎本武揚等

吉井、樺山、川村、西郷従道、大山、黒田は同じ薩摩で西郷にお世話に

なりながら政府側についた人たちです。

山形は汚職事件で責任を問われた時に、西郷に救われ、その後の地位を保てました。

勝は徳川慶喜切腹、徳川本家断絶が討幕側で決まっていたのを西郷が救ってくれました。

最後に浴衣のような衣装です。最初の案は陸軍大将の正装の軍服でしたが、変更になったそうです。

政府の誰かが西南戦争での逆賊大将西郷を意識したのでしょう。

軍服でない方が一般国民には良かったかもしれません。今日でも上野の西郷さんは人気がありますね。

高村光雲作ですが西郷は写真を一枚も写していませんので誰がモデルなのでしょう。

除幕式に出席した妻の糸子が「こげんなお人じゃなかった」と語ったと言われています。

顔なのか、服装なのか分かりません。

西郷は侍なのですから、廃刀令の後も普通外では、羽織、袴をつけます。

狩りの時も袴はつけるでしょう。

3，三傑没後の明治政府

木戸、西郷、大久保三傑が亡くなってから大日本帝国憲法発布、第一回衆議院選挙実施、日清戦争、日露戦争（明治３７　１９０４年）が起こり対応していきます。

その間総理大臣は伊藤博文３回（長州)、黒田清隆（薩摩)、山形有朋２回（長州)、松方正義２回（薩摩)、大隈重信２回（佐賀)、桂太郎（長州)、西園寺公望（公家）となり、ほぼ長州と薩摩藩閥が仕切ります。

伊藤博文は、幕末での功労はさほど評価されませんでしたが、木戸、大久保の評価により政治基盤盤を作り、三傑没後明治政府一番の功労者になっていきます。

あとあがき

日本史で二大英雄として豊臣秀吉と西郷隆盛を上げる人がいます。
ご存じのように秀吉は名もなき百姓から全国を制覇し、人臣を極める太閤になった人です。
この人の一生は分かりやすく、そんなに評価が分かれません。
一方西郷隆盛です。
我々はこの人が討幕の総大将で、廃藩置県を実行して封建主従制を廃止し、武士政権から四民平等を実行した仁であることを思い出すでしょう。
武士政権を作った源頼朝以来７７０年ぶりの武士政権消滅の革命です。
これほどの人が革命の１０年後に仲間と仲たがいして反乱を起こし、滅亡します。
どんな信念、性格の人だったのか当時の識者の意見もまとめてみました。
性格は人間ばなれした無私、高士の風、透明度の高い感情、学問は陽明学と禅学を修めます。
陽明学は儒教の一派ですが、朱子学（日本の）がと違って主人が間違っていると思うと意見し、逆らうことがあります。故に徳川幕府は嫌いました。
陽明学で有名なのは幕府に逆らった大石内蔵助、大塩平八郎、現在では三島由紀夫がいます
大久保利通は西郷が禅に走るのを嫌います。理由は分かりません。
高い感情を持つ人で、それを抑えるためと思えるのですが。

西洋の思想、哲学についての学問はあまり修めなかったようです。
国は強い兵と農業が必要が信念です。
工業、商業などの産業の発展を重要視しない。重農主義です。
富国強兵ではないのです。重農強兵なのです。
兵器産業もいらないのかについては、兵器は買って来ればよいと。

維新後の青写真を持ちません。討幕後隠居しようとしました。
しかしこの人が政府にいないと廃藩置県が出来ないので引っ張り出されます。(中央軍の創設、不平士族の暴走抑止のため)。

政治は内政より外交、軍事が優先の考えです。

征韓論が通らないと、薩摩に帰ります。
鹿児島の不平士族の行き（生き）場所を考えます。兵団の創設、鹿児島県の官吏起用は士族から優先採用します。
兵団はロシアの南下政策に投入するためと称しています。

西郷は与えられた問題に対し、関係者に諮り進むべき方針を都度決めます。率先して交渉（外交）と戦で決着していきます。そしてリーダーに補されていきます。
この人はどの英雄にも匹敵する統率力をもっています。
ただ政治上のあるべき構想や将来の青写真を持ちません。
自分から案を出しません。政治を進めるに、政策案を持ち込む人や参謀が必要なのです。
採用し決定した案の実行は障害があっても勇猛果敢に進めます。政策案を持ち込んだ人にとっては頼もしい人となります。軍事上の作戦も同じです。

征韓論もそうです。これを最初に主張したのは、板垣参議、副島外務卿、江藤新司法卿などです。西郷はその案に賛同して進めたのです。

西郷にも好き嫌いがあります。
性格的に好きな人は、「死ぬ気でやります、命もいりません」と理屈を言わずに迫ってくる人です。
行政能力がない人を廟議で推薦し揉めることがあります。大隈重信はここが嫌いです。
嫌いな人は小理屈を言って、自分を売り込んでくる人です。
嫌いなタイプの人は、産業の育成や資本主義を掲げる人です。これに関係する行政家は嫌いです。明治政府のほとんど要職を占める人はこれを最も大事な政策にします。富国強兵、文明開化に必要だからです。
福沢諭吉の「学問すすめ」は読んでいたようです。福沢諭吉へのコメントはありません。
福沢は民権、産業、経済、資本の思想を要にします。
福沢の思想とはあい受け入れられないと思われますが、福沢は西郷びいきです。福沢が大久保嫌いだったせいかもしれません。

二人は会っていないでしょう。

西南戦争は西郷にとって何だったのかです。

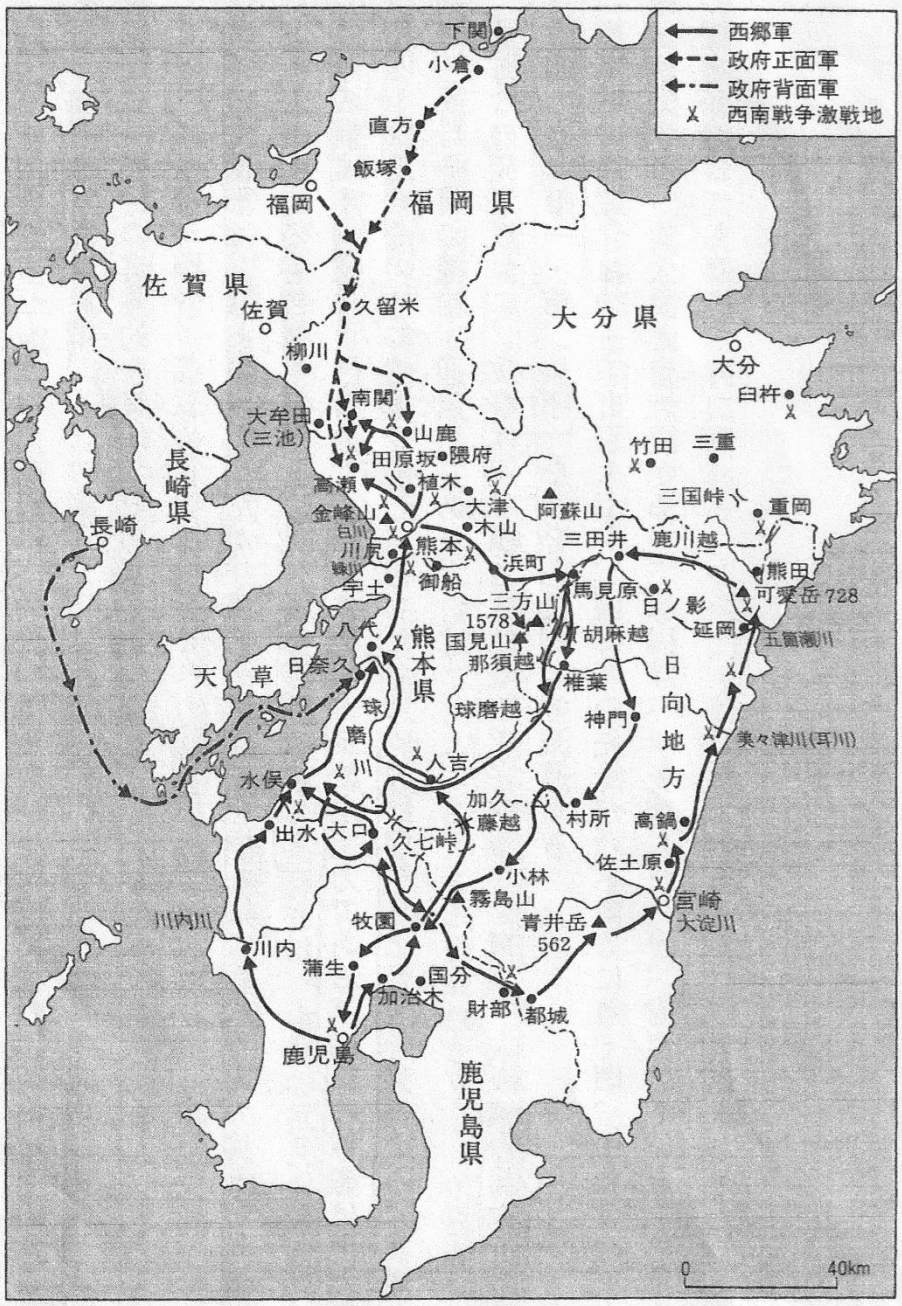
西郷にとって反乱はやむを得ぬ戦いだったのか、彼の性格から来るものだったのか、ほかに理由があったのか当時も今も歴史家に問われるところです。

以上

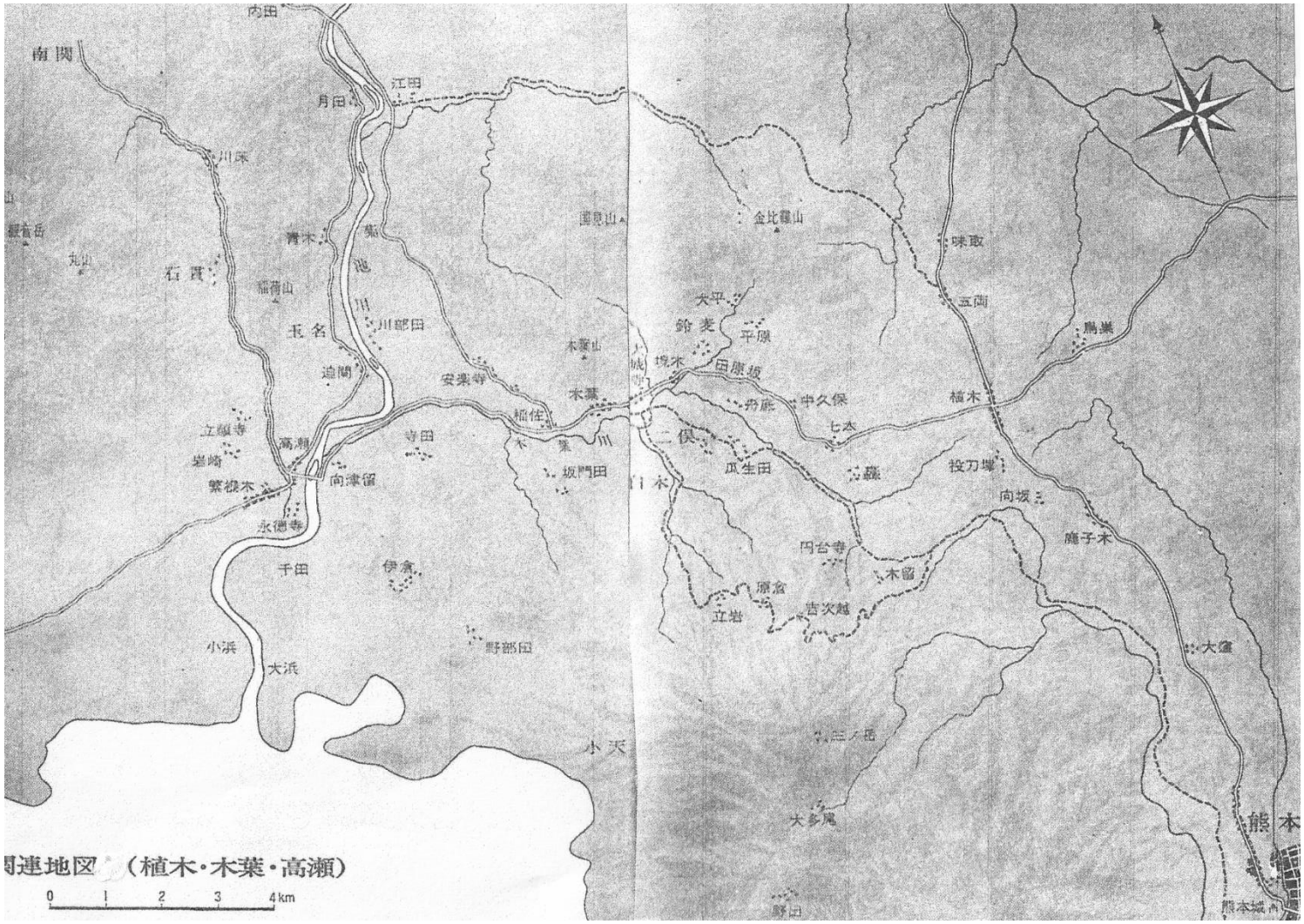
２０２３年2月6日

梅　一声

西南戦争 西郷軍、政府軍主要進路図

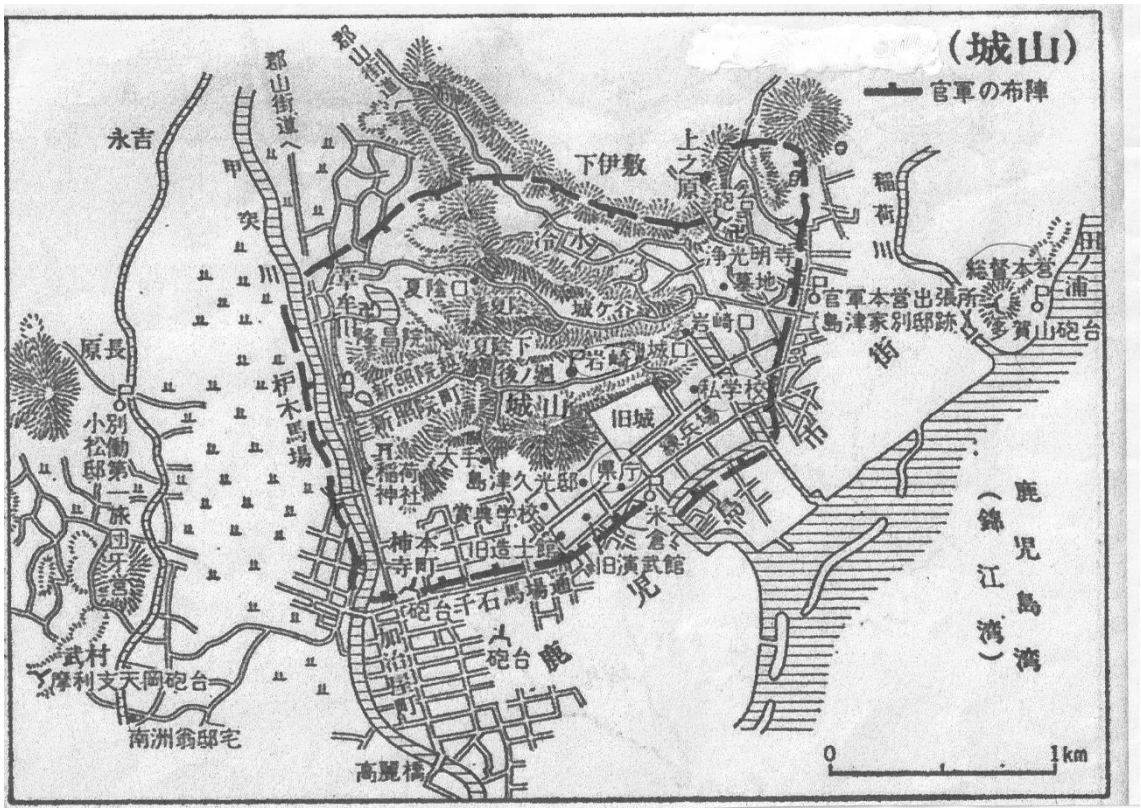


小川原正道著『西南戦争』（中公新書）より転載



関連地図（植木・木葉・高瀬）

0 1 2 3 4km



西郷隆盛関係資料

1，明治維新と文明開化（日本の歴史２１）　松尾正人編　２００４年　吉川弘文館

2．西郷隆盛　相川司　２０１７年　中公文庫

3，西郷隆盛（NHK カルチャーラジオ　歴史再発見　２０１８１～３月）　町田明広

4，幕末日本の事件史　日本カメラ博物館監修　２０２２年　山川出版社

5，福沢諭吉幕末・維新論集（明治十年丁丑公論）　山本博文　２０１２年　筑

摩書房
６，代表的日本人　内村鑑三著　鈴木範久訳　１９９５年　岩波文庫

７，西郷隆盛　別冊歴史読本２４号　２００８年　新人物往来社

８、国史大辞典―西郷隆盛

９，西郷隆盛全集第三・五・六巻　西郷隆盛全集編集委員会編纂　１９７８・７９年大和書房

10、大西郷全集第一巻、第三巻　１９２７・１９２８年　大西郷全集刊行会

11、西南記伝　黒龍会本部編纂　１９０９年　原書房（１９６９）

12、私説・日本合戦譚　（西南戦争）松本清張　１９７７年　文芸春秋

13、学問のすすめ　①福沢諭吉・解題小泉信三　１９４２年　岩波書店
②福沢諭吉・佐藤きむ訳・坂井達朗訳　2006 年　角川学芸出版